

東日本大震災から『10年』

～これまでの活動を振り返り、これからを見据えて～

岩手県 気仙薬剤師会 気仙中央薬局 金野良則

【はじめに】

青森県薬剤師会の皆様、「どしてら～？」(気仙弁では「なじょしてますか」といいます) 2011年3月11日に発生した東日本大震災から10年が経過しました。まったく想像していなかった事態に直面し、日々目の前の対応に追われていた私たちに対して、皆様から多大なご支援を賜りました。本当にありがとうございました。また、この度は貴会広報への寄稿の機会をいただきましてありがとうございます。この場をお借りして、当時から現在に至るまでの皆様の支援に感謝を申し上げるとともに、この10年の活動を振り返ってみたいと思います。

【気仙地区内薬局の被災状況】

2011年3月11日現在の保険薬局数は30薬局でしたが、陸前高田市内の9薬局は全て全壊、大船渡市内の20薬局は9薬局が全半壊しました。陸前高田市の会員2名が尊い命を失い、住居を失った会員は数多くいました。津波の被害を免れたとしても、多くはライフラインと通信手段が途絶え通常の薬局業務が行えない状態がしばらく続きました。





(大船渡市、陸前高田市 被災直後の写真)

発災当初、岩手県薬剤師会事務局と連絡が取れた際、目の前の業務に追われて自分に余裕がなかったため、外部からの支援を断っていました。しかし、その後県内や県外、多くの方々に支援に来ていただいたおかげで、結果的に地域に目を向けた活動ができました。青森の皆様には、3月末から6月末までの3か月間にわたり切れ目のないご支援をいただきました。正直、はじめのころは何を支援してもらえばよいのか分からず、ただただ私たちの薬局業務を手伝っていただいたことに対して、申し訳なく思った時期もありました。私自身、阪神淡路大震災や新潟中越地震、岩手内陸地震等の話を研修会等で聞いていて「被災地の薬剤師の業務は・・・」と想像していましたが、実際の現場では、薬局に押し寄せる様々な処方箋の調剤に追われて全く地域が見えていませんでした。そんな中、私たちのために「何でもやる」と支援に駆けつけてくれた青森県薬剤師会の皆様のおかげで、振り返ってみると、地域の役に立つ活動ができたのではないかと思います。



【活動内容】

超急性期は、基幹病院である大船渡病院や被害を免れた医療機関に「慢性疾患の薬」を求める患者が殺到しました。しかし、医療機関では患者から求めがあった薬を手書きで処方することが大多数であり、当時業務可能な薬局で在庫している薬品での対応は困難を極めました。ライフラインが復旧せず、電話連絡もできない中、予め医療機関等に了解を得ることで、同種同効薬や規格、剤形等の変更調剤を薬剤師の判断で行いました。まさに薬剤師の力量が試されたと思います。

医療機関の大多数が被災し、地域内全ての薬局が流失した陸前高田市では、避難所等を巡回する支援医療チームが処方せんを発行し、大船渡の薬局で調剤をして薬を届けていましたが、いろいろな事情により3月22日から5月半ばまで約2ヵ月の間、盛岡の薬局で調剤することになりました。地域住民が必要としている薬を自分たちで対応することができず、非常に不甲斐ない悔しい思いでいっぱいでした。

3月18日に大船渡市役所を訪問した際、積み上げられた支援薬品の管理に困っている状況を知り、その後は、医療チームで必要とする医薬品を県に依頼したり、代替医薬品の使用を提案したり、避難所で必要とされる一般用医薬品を分別したりと、支援薬剤師の協力により長期にわたって支援医薬品の管理を行うことができました。



(陸前高田市給食センター・・・当時の災害対策本部)



(大船渡市役所内の医薬品置き場)

4月には、支援物資の医薬品の中からOTC医薬品を取り揃え、避難所で「OTC相談カウンター」を設置しました。中には2時間で100名を超す相談者が列を作った避難所もありました。薬剤師が対応することで、救護所を受診すべきかOTCで対応可能であるか一種のトリアージを行い、症状に合った適切な医薬品をお渡しすることができるため、救護所等への受診者の抑制や長引く避難所生活の中で少しでも安心感を与えることができたと思います。この活動は、比較的大きな避難所を中心に行いながら、徐々に小さい避難所も巡回し、多くの支援薬剤師の力を借りて行うことができました。



(第1回 陸前高田市立第一中学校体育館でのOTCカウンター)



(大船渡市立北小学校でのOTCカウンター)

5月以降、生活の場が仮設住宅等へ移っていく中で、岩手県薬剤師会に協力していただいて薬セットを作成し、地域内2市1町の4000を超える仮設住宅等に配布しました。ここでも薬剤師が直接訪問して配布することで、薬の説明はもちろんのこと、普段服用している薬のことや仮設住宅という生活の中で不安なこと等様々なことを伺うことができました。そして、相談内容によって行政をはじめ他の専門チームに繋ぐことで、チームとして被災者をケアする活動ができたと思います。



(お薬箱セットやその他の市販薬を持って、仮設住宅へ向かう準備)



(仮設住宅では、薬セットを渡しながら、住民の話を傾聴)

2012年11月には、地域の2市1町（大船渡市、陸前高田市、住田町）と協力し、気仙地区内4000戸を超える仮設住宅等を薬剤師が全戸訪問する活動を行いました。

「なじよしてますか、お手紙プロジェクト」と題したこの活動は、支援していただいた青森県薬剤師会の薬剤師との会話の中から生まれた活動でした。震災から1年8カ月が経過し、自らの想いを口に出しにくくなった被災者に対して「手紙」という手段を用いることでその想いを引き出す狙いと、薬剤師が訪問することで、薬や健康、生活上の困りごとなどを聞き取ることを目的として行いました。震災当時に支援に来ていただいた、県内、県外の方々に応援依頼したところ、4日間でのべ200人の薬剤師が集っていただきました。活動の中では、それぞれが地域住民に対して、薬のことや生活のことなど、健康相談への対応や想いの傾聴等を行い、必要に応じて行政へのフィードバック等を行いました。この活動を通して、薬剤師の力がとても大きいことを痛感したと共に、参加して下さった方々の当地区への想いがとてもありがたく感じ、人と人との繋がりの大切さが心に残りました。この活動のもう一つの目的は、支援に来ていただいた方々に再度当地区に来ていただきたいことと、単純に「もう一度会いたい」ということでしたので、多くの皆様にお越しいただいたこと、それぞれの方々の方々の当地区への想いを感じ、心から嬉しかったです。



(訪問の前に朝のミーティング。。遠方から多くの仲間が駆けつけてくれた)



(第1週終了後の集合写真。。この後は大懇親会へ)



(なじよしてありますか? のチラシ。。 4000 を超える仮設住宅へ配布)



(回収された期限切れの薬。。 その後は廃棄作業)

その後、平成 25 年には陸前高田市で日赤救護所から引き継ぎ、土日祝日等に診療を行っていた「岩手県医師会高田診療所」における院内調剤業務を行うため、県内や地域内の薬剤師の派遣を毎週末行いました。大船渡市では「薬の正しい使い方普及事業」として、地域住民に対して、個別訪問や仮設住宅でのくすり相談を行いました。



(仮設住宅でのくすり相談は、地元の新聞でも取り上げられた)

震災から7年が経過しようとしていた平成30年の1月には「東日本大震災復興フォーラム」として、7年の活動を振り返りながら、今後の活動を考える企画をしました。新年早々の多忙な時期ではありましたが、2日間で約100名の参加のもと、地域の医師や行政の方からの講話や、被災当時の活動写真等の展示を行いました。参加者は当時の活動を思い出し、懐かしむとともに振り返りながら、改めて災害対策を強化すべきことを感じていただいたと思います。

東日本大震災復興フォーラム

in けせん

「東日本大震災から7年、
これまでの歩みを振り返り、
新たな一歩を踏み出すために」
～東日本大震災被災地発、地域に根ざした薬剤師の在り方とは～

平成30年
1月7日(日)14:00・8日(月)祝10:00

会場
1日目:大船渡商工会議所会館
2日目:大船渡市民文化会館(リアスホール)

1月7日(日) 会場: 大船渡商工会議所会館 12時～13時
13:00 受付開始
14:00 開会式
14:15 東日本大震災までの薬剤師の活動写真
16:15～17:00 質疑 大船渡市
17:15～18:15 特別講演

1月8日(月) 会場: 大船渡市民文化会館 10時～10時
10:00 受付開始
10:00～12:00 シンポジウム
12:00～13:00 質疑 大船渡市
13:00～13:00 特別講演 (1日限)

【注】 一般社団法人山手県薬剤師会、山手県薬剤師会、協賛組合員制ファーマシー



(震災当時の写真や、活動の写真などを展示)

東日本大震災復興フォーラム「提言」

東日本大震災を経験した薬剤師会として、今後も**継続して地域住民に寄り添い**、他の関係職種と連携をしながら『くすり』という「モノ」を介さなくても、**地域から信頼され、相談される存在になることで、地域住民一人ひとりの人生に価値ある貢献ができるようになることを目指します。**

(復興フォーラムでの「提言」)

【考察】

震災当時の活動における薬剤師の役割と、平時における薬剤師の役割を比較してみると、対応する場所等の違いはあるものの、実は普段から行っている業務と変わらないように感じました。例えば、震災当時は避難所や救護所からの処方箋でしたが、平時では、通常の医療機関からの処方箋調剤を行っています。避難所や仮設住宅への訪問は、平時では在宅

訪問を行っています。行政や医療との連携も普段から行っています。このように、被災地での活動は、平時と環境は異なるものの普段行っている活動の延長で実施できると思われます。そう考えると、普段の活動をいかに充実したものにしていくかが問われると思います。

震災により「日常」がある日突然『非日常』に変わりますが、ある日突然「病気」を告げられることは、災害に見舞われたと同様に、「日常」から「非日常」に変わるのだと思います。人は日常が奪われたとき、どうしようもない不安や恐怖などを抱えながら「非日常」の中を過ごしていきます。そして、時間の経過とともに、「非日常」が「新たな日常」に変化していきます。非日常を許容し、それを日常として過ごしていくためには、人との関りがとても重要になると思います。私自身、この10年間、自分たちだけでは成しえなかった活動を、多くの仲間の支えとともに行うことができた実感しています。



(大きな家を被災し、夫を失い、仮設住宅4畳半での生活を余儀なくされた)

3. おわりに

東日本大震災では、津波による被害のため、慢性疾患の薬を求める方が多く、避難所からの処方せん発行が行われました。このことにより、被害を免れた薬局や薬剤師は処方せん調剤への対応が中心となってしまい、地域に対する活動が後手に回ってしまったことが悔やまれます。支援薬剤師の活動は避難所や救護所での活動が想定されていましたが、被災を免れた医療機関からの処方せん調剤により、地域の薬剤師の身動きが取れなくなるなか、避難所での服用薬の聞き取りや服薬指導など、地域に根差した活動を行うために、業務継続可能な薬局における避難所処方せんなどの調剤業務補助も支援業務として必須だと感じました。

被災地での活動は地域（他職種）との連携が必須です。そのため、平時から顔が見える

形で信頼関係を構築することが大事だと思います。そして、普段から責任を持って行動し、想定外の出来事に対処する判断力を養うよう努めなければなりません。

私自身、震災で家族、住居、薬局、知人…と、多くのものを失いました。しかし、薬剤師として活動していく中で、多くの方の温かい支援が心の支えとなり、その絆を感じることでさらなる活動に繋がりました。この震災がなければ得られなかった強い絆を大切に、薬剤師として地域住民に対してできることを考えながら過ごしていきたいと思っています。

10年が経過した当地区の写真をいくつか掲載させていただきます。

多くの支援により、街並みは変化しました。当初から危惧していた「心の復興」はどこまで進んでいるのかについては、まだまだ分かりません。非日常を日常として過ごしている被災地・被災者にとって10年はゴールでもなく、区切りでもありません。いまだ心の傷がいえない中で、昨年からの新型コロナウイルス感染症も加わり、人と接することが少なくなり、不安な日々を過ごしている方が多いと思います。

状況が許せば、ぜひ当地区に足を運んでいただき、10年の変化を感じていただければ幸いです。もちろん、ご連絡をいただければ、感染対策を取ったうえで、できる限りのおもてなしをさせていただきたいと思っています。

皆さん、絶対にまたお会いしましょう。



(陸前高田市市街地 2020年市民会館が完成)



(高田松原津波復興祈念公園。。。防潮堤の上から海を眺めることができる)



(防潮堤の上には、献花台)



(防潮堤から市街地を望む)



(大船渡市市街地)